

さくらだより



災害医療チーム派遣メンバー

被災地支援

病院長 福田 修

このたびの東日本大震災により被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げますと共に、被災地の一刻も早い復興をお祈り申し上げます。また一部医薬品工場の被災も発生し、患者さんにお渡しするお薬の一部に変更を余儀無くされ、ご迷惑をおかけし申し訳ありません。もうしばらくお待ちください。

齋藤記念病院では、職員4名（医師1名、看護師2名、事務員1名）が、平成23年5月24～26日に、新潟県医師会のJMAT（日本医師会災害医療チーム）の被災地支援活動として、宮城県石巻市の避難所に入り医療活動のお手伝いをしてまいりました。初めての経験でもあり、被災地支援とともに、逆に多くのことを学ばせていただきました。職員が支援に向かっている間は、職員数は少なくなり業務量も増えるわけですので、留守を預かる病院職員も間接的災害支援を行っているという考え方でがんばりました。引き続き互助精神を大切にしていきたいと思います。

書籍「もしドラ：もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら」のミリオンセラー、映画化も手伝って、「マネジメント」が注目されています。顧客重視が取り上げられています。その顧客とは一体何なのでしょう？病院の場合は、患者さんだけのように考えがちですが、その組織・病院が充実・繁栄することにより幸せになれる人が対象になるという考え方で、顧客は患者さんだけでなく、そのご家族、病院職員、その家族、病院に関連するすべての人であるというものです。「ひとりひとりがマネージャー（管理者、経営者）になって考えよう」などさまざまなキーワードが出てきます。いずれも、新たに知る事が多いのですが、わかりやすく確かにためになります。齋藤記念病院では現在、医療の質をより改善するため世界標準の品質マネジメントシステム：ISO 9001の導入を進めており、患者さんにはよりよい「環境を提供すべく努力いたしております。末筆ながら皆様の心身のご健康を祈念申し上げます。

病院理念

*私たちは「患者さんに選ばれる病院」「職員が誇りを持って働ける病院」を目指します。

基本方針

- *私たちは自己研鑽に努め、安全で良質な医療を提供します。
- *私たちはコミュニケーションを大切にし優しく説明・対応します。
- *私たちは救急医療からリハビリテーション機能、在宅医療まで安心できる診療体制を充実させます。
- *私たちは医療機能を整備し経営改善に努めます。



齋藤記念病院の看護師として……

看護部長 佐藤 和美

「こでまりの咲くあの道を歩いてきたのですか
あなたの傘に小さな白い花びらがついてます」



これは、脊椎損傷で不自由な体になった星野富弘氏の詩です。今頃の時期に新葉とともに白い五弁花を散形状につけ、枝に連続して並ぶこでまりの花。口でくわえた筆に全身の力を込めて描いたその絵に、この詩が添えられています。

一片の花びらを見て、それがこでまりの花であることをみとる力の鋭さ、そして、そこからその人の歩いてきた道に思いをはせる感性のこの鋭さはどうでしょうか。そしてこのような短い言葉に何と絵画的に明るく鮮やかに表現されていることでしょうか。

私はこでまりの花の咲く、この時期に花を見るとこの詩を思い出します。

この詩から、一片の花びらを見逃さず、それがこでまりの花であることを洞察する豊かな知識と経験の大切さを学びます。ちょっとした患者さんの一言もまた一片の花びらかもしれません。そこから、そのひとの歩んできた道を推しはかることのできる看護師になれるかどうか。職業人としてのあり方は自らの人間性、生き方そのものを映し出します。

……自分を磨かなければ相手が見えない

……自分の人間としての器を広げなければ相手を広く、そして深く受け止めることができない

専門的な知識や技術だけでは、患者さんと接していくことなど、とてもできることはありません。患者さんは全く予期しなかった病人という体験を強いられた人々ともいえます。苦痛や恐怖を感じながら入院生活を送らなければなりません。その一番そばにいるのが私たち看護師です。患者さんへの一言、何気ない態度にその看護師の人間性が表れてしまうと思えるからです。患者さんの目には、その看護師としての学びが、傘に付けた一片の花びらとなり、どんな道を歩んできたかを如実に表すことになります。

“看護の対象はかけがえのない人”であることは、言うまでもないあたりまえのことですが、その当たり前のことにどうかかわっていくかを、日々問われるのが看護師という職業であるように思います。齋藤記念病院の看護師みんなで、今より少しでも人間性豊かな“私”へと変わっていきたいものと考えています



こでまりの咲く
あの道を
歩いてきたのですか
あなたの傘に
小さな白い花びらが
ついてます
星野富弘

多くの職種が関わって

患者さんの在宅に向けての退院調整を

積極的に行っています

患者様の状態、退院後の生活様式などを考慮して、病院では、週1回、看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療相談員、時には患者様、ご家族様と共に合同のカンファレンス（検討会）を行っています。

“2病棟のベットサイドで話し合いの風景”



春から夏にかけて看護学生が就職を考える為に 病院見学に来ています！

看護師になる為に看護大学や看護学校で学んでいる学生が、卒業後の就職先を考える為に病院見学に訪れます。

当齋藤記念病院にも何校かの学生が見学に来てくださいました。

当日は看護部の担当者や院長が学生の質問に答え、病院を知っていただく為に院内の案内や、就職後の教育など説明しています。また実際の職場の雰囲気を感じていただくためにナースステーション内で現場の看護師に説明をしてもらうなど気楽にすごしてもらいました。

学生は

- ・懇談会で学校の先輩から説明を受け身近に感じて安心した
- ・病棟で簡単な技術の体験ができよかった
- ・院長が参加して病院の考え方など聞いてよかった
- ・新人に教えるプログラムなど充実していて安心した

など等とても好評だった。

ぜひ一緒に働きましょうね！…と担当の看護師も自分達の仕事や学ぶ姿勢を説明ができて有意義だったとの感想でした。



東日本大震災医療救援活動報告

脳神経外科 壺井祥史

今回、齋藤記念病院の医療支援チームとして東日本大震災の医療救助活動に行ってきました。チーム編成は医師1名、看護師2名、事務1名の計4名で、主な活動は避難所での診療業務でした。平成23年5月24日早朝に病院を出発し、新潟県庁でバスに乗り換え、石巻赤十字病院へ向かいました。石巻までの道路はところどころ段差が大きいところがあったもののほぼ復旧されていて、通行上問題になるところはありませんでした。

石巻赤十字病院でのオリエンテーションを受け、活動場所となる、避難所へ移動しました。避難所である中学校の体育館はまさにテレビで見ていたような場所で、段ボールでなんとか自分たちのスペースを作っているもののほとんどプライベートな空間はないものでした。ただ、建物は新しく、上下水道、電気は復旧していたため、衛生状態は比較的保たれていました。

診療所を受診される方は咳や不眠がほとんどで、生活環境が劣悪で、ストレスの多い生活をしていることが容易に理解できました。生活環境の改善が得られなければ、根本的な治療は難しく、薬でその場しのぎの対応をせざるを得ない状況でした。午後4時に診療を終了し、赤十字病院へ移動し、全体ミーティングに参加しました。その後、宿泊場所に移動し、その日の活動を終えました。翌日、早朝の余震で目が覚めましたが、幸い揺れは小さく、津波の心配もありませんでした。避難所へ向かい、この日は一日避難所の診察を行いました。やはり、咳、不眠を訴える方がほとんどでした。前日と同様、午後4時で診療を終了し、赤十字病院へ移動し、ミーティングに参加しました。5月26日は午前中まで診療を行い、石巻赤十字病院で次チームに申し送りを行い、活動を終了しました。全体を通して咳や不眠患者が多く環境面での問題がまだまだ多いと思われました。



今回我々が診療を行った避難所は比較的衛生環境が良いところでしたが、避難所によっては電気もまだ通っていないところがあり、環境は悪

く、咳や下痢の患者が多いとのことでした。今回の活動で我々ができたことは少なかったですが、わずかでも被災地のために活動できたことはとても良い経験になりました。

被災地はまだまだがれきが山積みで継続的な支援が必要な状態でした。これで終わりではなく、今後も様々な形で支援を継続していければと思います。



